

ご挨拶

国民的スポーツにみる心の在り方

公益社団法人 宮城県精神保健福祉協会
みやぎ心のケアセンター
センター長 福地 成

東日本大震災から12年が経過し、私たちみやぎ心のケアセンターが開設してから同じ年月が過ぎました。みなさまからの日頃のご支援には心より感謝しております。

その国を象徴するスポーツの中には、逆境におかれたときの心の在り方が反映されていると思います。私が「日本っぽい」と感じるのは相撲、高校野球、箱根駅伝です。

相撲は日本の国技であり、いわゆる日本固有の「武士道」の精神が宿っています。文字通り裸一貫でぶつかり合い、正々堂々と組み合うのが潔いとされています。体格に勝る力士が腕力にモノを言わせて、張り手ばかりで勝利をしても、あまり良い評価にはなりません。また、勝負に勝った力士は派手に喜ぶことは許さず、常に謙虚であるべきで、敗者の気持ちも丁寧に汲み取るのが美徳とされています。

高校野球もそう。なぜ、高校球児は坊主頭なのか。なぜ、全国大会を真夏に行い、試合の開始と終了にサイレンを鳴らすのか。日本国民は高校野球と戦争を重ね合わせていることに疑いの余地はありません。大会中に終戦記念日があり、サイレンとともに黙とうする球児を見て、戦火に散った若き魂を重ね合わせているのです。海外では、アマチュア野球において球数制限をするのが常識になっているにも関わらず、未だに甲子園ではものすごい投球数を投げる投手がいます。そして、その投手は最大級の賛美を浴びます。

お正月の定番となっている箱根駅伝もしかり。脱水でフラフラになり、足を引きずるほどのケガをしても、チームのために這ってでも必死でタスキをつなぎます。ギリギリまであきらめず、チームのために身を粉にして捧げる姿を見て、国民は感動して涙するのです。窮地にも負けずに歯を食いしばり、正々堂々と真正面から取り組み、苦しい、悲しい感情を表出せず、個よりも集団のために身を捧げる。それが美しいとされるのが日本の文化なのだと思います。

東日本大震災をはじめとするさまざまな国民のトラウマを経験し、私たちはこの日本固有の美徳が、必ずしも心の健康によくないことに気づきはじめています。相撲では力にモノを言わせる外国人力士が参入し、高校野球では球数制限がもうけられ、箱根駅伝では選手の意向に関わらず監督が棄権を決断する場面も見られるようになりました。

私たちは、未曾有の大災害からどのように回復してきているのかきちんと振り返る時期にきています。しんどい時は「しんどい」と言ってもいい。もうちょっとワガママになってもいい。傷ついたコミュニティー、ひいては日本全体の変化も見守りながら、当センターが回復の土台になればと思います。まだまだ道半ばです。引き続き、皆様からのご指導、ご鞭撻を頂ければ幸いです。